

AJCE 会報

コンサルティング・エンジニア

特集：日豪交換研修2009 報告



Vol.33 No.3

平成22年1月・新春号

倫理要綱

(協会の目的)

社団法人日本コンサルティング・エンジニア協会は、社会環境および自然環境に関して技術に立脚した公正なコンサルティング・サービスを提供する知的専門家であるコンサルティング・エンジニアの業務の発展、社会的地位の向上および職業倫理の確立を図り、もって持続可能で豊かな社会を目指して、科学技術及び産業の発展、社会の福祉、人類の健康と安全の増進ならびに海外との経済、技術および研究に関する協力の促進に寄与することを目的とする。

(前文)

第一条 会員が、ここに掲げる目的に沿って活動するように、倫理要綱を定める。

(社会的な責任の認識)

第二条 会員は、コンサルティング・サービスの成果が広く将来にわたって大きな影響を及ぼすことに鑑み、社会的な責任を強く認識しなければならない。

(顧客利益の擁護)

第三条 会員は、顧客に対し正当にして最善の利益を図るように努めなければならない。

二 会員は、顧客の利益に役立つと考えるときは進んで他の専門家と協力するよう努めなければならない。

(公正の維持)

第四条 会員は、コンサルタントが名誉ある職業であることを自覚し、公正な立場を維持しなければならない。

(独立性の維持)

第五条 会員の職務上の助言、判断または意思決定は、いかなる場合においても第三者または他の機関の影響を受けてはならない。

(業務報酬の公正)

第六条 会員の受ける業務報酬は、公正なものでなければならず、顧客より支払われる業務報酬のみを受け取るものとする。

(専門性の保持)

第七条 会員は、自己の専門分野を明確にしなければならない。

二 会員は、自己の専門外の事項を表示し、あるいは、自己の誇大な広告をしてはならない。また、専門外の業務を引き受ける等、業務遂行につき確信を持ってない業務に携わってはならない。

(秘密の保持)

第八条 会員は、業務上知り得た顧客の秘密を他に漏らし、または盗用してはならない。

(他者の業務の尊重)

第九条 会員は、他の会員あるいは同業者の名誉を傷つけ、またはそれらの業務を妨げるようなことをしてはならない。

(平成17年4月12日 第202回理事会制定)

巻頭言

2010年の年頭にあって

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 代表取締役会長

AJCE 会長 廣谷彰彦 01

寄稿

官民連携による我が国建設技術の海外展開の促進

国土交通省総合政策局

国際建設管理官 名波義昭 03

特集：日豪交換研修 2009 報告

総括

金井恵一 04

～日豪の架け橋としての交換研修を終えて～

2009年 日豪交換研修生受入報告

渡部数樹 06

2009年 日豪交換研修生受入報告

神山 敦 08

日豪交換研修生受入報告

瀧田陽平・笠瀨明日香 10

YPEPP2009 日豪交換研修に参加して

澤部純弘・長谷川 正 12

ヤングサミット

浅田薫永 14

シリーズ・FIDIC 会員協会の紹介 第2回

オーストラリア・コンサルティング・エンジニア協会 (ACEA)

広報委員会 編 18

シリーズ・海外だより その3

シリアのファーストフード

株式会社日水コン 海外事業部技術部

主任 木村光志 19

シリーズ・こだわりの会員

イギリスと日本の鉄道の今昔を考える

田中宏技術士事務所 代表

AJCE 理事 技術交流委員会副委員長 田中 宏 20

国際活動委員会

FIDIC ニュース 2009年 10月号抄訳

訳責：国際活動委員会 IFI 分科会 21

シリーズ・FIDIC 契約約款の紹介

その3 FIDIC Gold Book

AJCE 事務局 24

日中韓 3 協会首脳会談

AJCE 事務局 25

KENCA AJCE JCCA 意見交換会

AJCE 事務局 26

新会員の紹介

27

事務局報告

28

編集後記

29

巻頭言

2010年の年頭にあたって

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 代表取締役会長
AJCE会長 廣谷彰彦

謹んで新春のお慶びを申し上げます。会員企業の役職員、ご家族、関係の皆様にとって実り多い年になりますよう、心より祈念いたします。今年も協会活動をさらに活性化させ、皆様のご期待にお応えできるよう努力いたします。本年も何卒宜しく願い申し上げます。

昨年は、一昨年から続く世界経済の混乱の余波、夏の政権交代など、国内外において大きな動きが続き、AJCEでは、こうした情勢に対応すべく、FIDICとその会員協会との活発な情報交換、セミナー開催によるコンサルタント技術者の技術力向上支援、若手技術者の育成活動などを実施いたしました。

こうした活動の一端を振り返りつつ、今年の展望について述べたいと思います。

1. AJCE 年次セミナーの開催

2009年は「世界に飛躍するコンサルタント-将来市場の展望-」と題し、7月14日(火)に実施しました。世界同時不況における各国政府の対策や、不況からいち早く回復し力強い成長を見せる新興国の状況などを踏まえ、今回は、わが国の国際開発援助を



総合的に推進する国際協力機構、さまざまな海外プロジェクトの経験・実績を持つ民間コンサルタント、およびこの分野に造詣の深い学識経験者、それぞれの分野から3名の方をお招きし、海外市場の今後の展望と、その中でわが国のコンサルタントのあり方についてご講演を頂きました。

今後も我々を取り巻く課題を的確に把握し、よりタイムリーな話題をテーマとしたセミナーを実施していきます。

2. FIDIC-2009 ロンドン大会への参加

FIDIC2009年次大会は、イギリス・ロンドンにおいて9月13日～16日の会期で開催されました。テーマは”Global challenges - Sustainable solutions ~世界の挑戦、持続可能な解決策~“であり、AJCEから32名が参加しました。

今大会は、世界同時不況後ではじめての大会でしたが、不況により対応の遅れが懸念される、また不況からの脱却の鍵となる「低炭素社会の実現」に向け、コンサルタント技術者が果たすべき役割や業界として挑戦すべきこと、成功事例等について、参加者の間で広くアイデアを共有することができました。

また会期中に行われたFIDIC総会において、私がFIDIC新理事に選任されるとともに、FIDICアジア・太平洋地域組織であるASPAC総会において、内村好AJCE副会長がASPAC理事に選任されました。

今後もFIDIC/ASPAC活動を通じて国際情勢をいち早くキャッチし、会員企業の皆様と共有するとともに、クライアントやエンドユーザーの皆様に向けて広く発信していきます。



3. FIDIC 会員協会との覚書の締結

3月12日(木)に、ウズベキスタン コンサルティング・エンジニア協会 (UZACE) と相互協力や提携促進に関する覚書を交わしました。続いて4月27日には、アゼルバイジャン コンサルティング・エンジニア協会 (NECSA) との間で覚書を交わしました。

2つの国は近年FIDICに加盟し、ともに新興国として注目を集めています。今回の覚書締結により、AJCEの海外活動事業や研修・研究事業といった主要事業がさらに充実していくものと確信しております。



4. 日豪交換研修の実施

オーストラリアから若手技術者4名が来日し、10月13日(火)～10月30日(金)の約3週間に渡り、会員企業において実務研修を行いました。日豪交換研修は、両国の若手技術者に研修・交流の機会を提供し、技術力の向上はもちろんのこと、海外で活躍できる技術者育成などに大きな役割を果たしている事例としてFIDICの中でも注目を集めている取組です。

今後より多くの若手技術者に様々な機会を提供し、次代の社会資本整備を担う技術者を育成するとともに、こうした新しい風を呼び込み、コンサルティング・エンジニア産業の更なる活性化を図っていきます。



これからもAJCEは、各国のコンサルティング・エンジニア協会ならびに企業との連携を図りつつ、世界の動向を的確につかみ、我が国のコンサルティング・エンジニア産業の発展に貢献していきます。

本年もAJCEの活動に、皆様のご理解、ご指導、ご支援を賜りますよう、宜しくお願いいたします。

寄稿

官民連携による我が国建設技術の海外展開の促進

国土交通省総合政策局
国際建設管理官 名波義昭

1.はじめに

国内市場が縮小する中、我が国建設産業は、国内依存度が高い産業構造を転換するために、高い技術力・ノウハウを活かした海外展開を図り、我が国の経済成長に貢献することが重要である。しかしながら、海外建設プロジェクトにおいては、価格競争力の高い新興国の台頭により、受注に向けた競争が激化するとともに、受注後も、相手国発注機関の技術的な理解の欠如により、我が国建設企業と発注機関の間で問題が多発するなど、海外展開への大きな支障となっている。

このため、国土交通省においては、開発途上国において高い関心が集まっている官民協働型インフラ整備事業への本邦企業の参画の推進を図るとともに、受注後の問題に対応するための体制を構築することにより、官民連携による我が国建設技術の海外展開の促進を図っているところである。

2.国土交通省における取り組み

(1)官民協働型インフラ整備事業への本邦企業の参画推進

開発途上国においては、予想される膨大なインフラ需要に対し、自国資金やODA予算が不足しているため、民間のノウハウや資金力を活用した官民連携型のインフラ整備手法に高い関心が集まっている。

このような状況の中で、平成19年度より産学官協働の推進体制を整備し、相手国政府等との政策対話や技術セミナーの実施、パイロットプロジェクトの形成に取り組んでいる。具体的には、我が国が提案する高速道路の官民協働型インフラ整備手法についてベトナム政府と政策対話を行うなど、本邦企業の参画推進に向けた取り組みを行っているところである。

(2)海外建設プロジェクトにおける課題への対応

海外建設プロジェクトにおいては、厳しい自然・社会条件下での施工が必要であり、また、相手国発注機関の技術的な理解の欠如により、現場条件に合わせた工法の変更や建設工事中の課題発生に対して迅速に対応できないなど、多くの建設企業が苦慮している。

このため、平成21年5月、海外建設プロジェクトにおける課題、対応方策に関する建設会社、コンサルタントからの相談窓口として省内に「海外建設ホットライン」を設置し、外務省・JICA等と連携しつつ、担当官を派遣するなどして、相手国政府・発注機関への働きかけや、専門家の紹介等のサポートを実施しているところである。

3.海外建設プロジェクトにおけるコンサルタントの役割

海外建設プロジェクトにおいて、コンサルタントは調査や設計はもちろんのこと、FIDIC標準約款に基づくThe Engineerとして、日本国内では発注者が行う工事監理・契約管理も実施するなど、極めて重要な役割を果たしている。The Engineerは、発注者と請負者の間に立つて公正・中立であることが求められる。しかしながら発展途上国等においては、発注者の法令遵守の意識の欠如、マネジメント能力の不足等から、The Engineerの判断に発注者の意向が過度に反映されていると思われるケースも見受けられる。我が国のコンサルタントが、The Engineerとしての本来の役割をより一層発揮することができるよう期待したい。

また、今後は日本のODA関係の事業だけではなく、他ドナーや自国資金の事業にも参入していくことが望まれる。

そのためには、若手技術者が減少する中で、海外で活躍できる人材を育成することが重要である。基本的には人材育成は各社の責務であるが、国として支援できることがあるか検討して参りたい。

4.おわりに

現在、国土交通省においては、政務三役のご指導のもと所管の行政に関する成長戦略の策定に向けた検討を進めており、建設産業の更なる国際化がテーマのひとつに位置づけられている。国土交通省としては、引き続き、我が国の強みである高度な建設技術・ノウハウを活かし、官民連携による我が国建設技術の海外展開の促進を図っていく所存である。

特集：日豪交換研修 2009 報告

特集：日豪交換研修 2009 報告

総括

～日豪の架け橋としての交換研修を終えて～

株式会社建設技術研究所 企画本部経営企画部長
技術研修委員会副委員長 金井 恵一

1995年に締結された日豪覚書に基づいて翌96年から始まった日本とオーストラリアの若手エンジニアの交換研修・日豪交歓研修(Young Professionals Exchange Program : YPEP)、今回はオーストラリアから4名の研修生を日本に迎えて10月13日から30日までの約3週間にわたって実施されました。世界的な経済不況の影響もあって参加研修生は例年より少なかったものの、受け入れ企業の皆様による行き届いた研修プログラムの提供と暖かいおもてなしにより、研修生にとって得るところの多い充実した研修となりました。2007年から取り入れた数ヶ月間に及ぶ「事前研修(対話)」も今回は順調に行われ、訪問前の地ならしとしての役割があらためて認識されました。交換研修は、技術的な交流・意見交換などもさることながら、異なる文化・慣習に触れることによる新たな発見、視野の拡大と、人的ネットワークの構築もその大きな目的です。ここで培われた人脈や関係を生かして、将来、技術提携やプロジェクトへの共同参画

など、業務面でのパートナーシップが築かれることになれば幸いです。

若手エンジニアの活動は、FIDIC-Young Professionals Forum(YPF)をはじめ、昨年、FIDIC アジア太平洋地域会員協会連合(ASPAC)に発足した ASPAC-YPF など年々活発になってきており、AJCEの技術研修委員会にもあらためてYoung Professionals(YP)分科会が設立されました。今後さまざまな若手エンジニアのための研修活動が、YP分科会のイニシアティブで行われることとなりますので、ご支援をお願いします。

また、2010年には日本からオーストラリアへ研修生を送ります。アジア太平洋地域への世界の注目が集まる中、その中核である日本とオーストラリア両国の関係は以前にもまして重要になってまいります。多数の若手エンジニアが参加できるよう、会員企業の皆様方の積極的なご協力をいただきたく、よろしく申し上げます。



1995年10月14日 日豪覚書締結 全日空ホテル(東京)にて
左から 豪州マクマラン貿易相、ACEAケル会長、AJCE 梅田会長、池田科学技術庁審議官

研修生及び受入企業

| 名 前 | 企業名 | 専 門 | 受入企業 |
|---------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| Jamie Chapman | GHD | Civil Engineering (Rail) | (株)オリエンタルコンサルタンツ GC事業本部 |
| Nobu Ito | GHD | Rail Way | (株)オリエンタルコンサルタンツ SC事業本部 |
| Hilary Pocock | Arup | Water and Sustainability | (株)建設技術研究所 東北支社・九州支社 |
| David Dixon | Kellogg, Brown and Root | Rail and Road | (株)長大 札幌支店・東京支店 |

全体日程

- 1月 受入企業募集
- 2月 研修生募集
- 4月24日 第1回説明会開催
研修開始
- メールによる研修 -
- 9月29日 第2回説明会開催
- 10月13日～30日 研修生受入
 - 10月13日 オリエンテーション・歓迎会
 - 10月24日25日 京都・奈良旅行
 - 10月30日 ヤングサミット・送別会

歓迎会



歓迎会にはAJCEの理事も出席

オリエンテーション



メモを見ながら日本語で自己紹介する研修生と心配そうに見つめるメンター



理事を前にして再度日本語で自己紹介をする研修生

送別会



乾杯

特集：日豪交換研修2009 報告

2009年 日豪交換研修生受入報告

株式会社オリエンタルコンサルタンツ SC事業本部 道路グループ
渡部 数樹

1. 受入概要

今回、私がメンターとなったのは、オーストラリアのGHD社のJamie Chapmanさんであった。

我が社は、JamieさんとNobu Itoさんの2名を同社より研修生として迎え入れ、YPEP2009プログラムに参加することとなった。Nobuさんに係わる詳細については、弊社・神山氏の報告も併せて参照していただきたい。

Jamieさんは鉄道が専門分野ということで、道路計画・設計を専門とする私とは専門分野で多少相違があったものの、事前のメールのやり取りなどでお互いのことを認識し、鉄道に関する社外研修と、道路(特に舗装)に関する社内・社外研修を主体とすることで双方理解し、本研修に臨んだ。

2. 社内研修の概要

社内において実施した研修は以下に示す通りである。

- ・会社説明・分野(受け入れ先)説明
- ・若手技術者との交流会
- ・研修結果発表会
- ・道路・鉄道・舗装設計に関する意見交換
- ・舗装アセットマネジメントの検討

2.1 若手技術者との交流会

『若手技術者との交流会』においては、弊社の若手技術者の英語勉強も目的の一つであり、我々にとってもメリットが大きいものであった。

GHD社では、自主的に若手が集まって双方の技術的な研鑽を行うことが習慣化しているようであり、日本の建設コンサルタントも見習いたい部分である。

2.2 道路・鉄道・舗装設計に関する意見交換

道路・鉄道・舗装設計の日豪比較検討においては、オーストラリアの道路設計では地形的な特徴もあり、緩

和曲線を使用しないことが多いなど、興味深い設計事情を聞くことが出来た。

また、Jamieさん本人が作成した、駅舎施設・駅周辺施設・鉄道の検討が可能な総合的なCGを見せてもらったが、完成度の高さには驚いた。

3. 社外研修の概要

社外における主要な研修は、以下に示す通りである。

- ・京王「調布駅付近連続立体事業」現場見学
- ・成田新高速鉄道、鉄建建設建設技術総合センター見学
- ・東京湾横断道路・三芳スマートIC見学
- ・京急蒲田駅付近連続立体交差事業見学
- ・大宮『鉄道博物館』見学

3.1 東京湾横断道路見学

私の専門が道路設計ということもあり、日本が世界に誇る海底シールドトンネルである東京湾横断道路の現場見学を実施した。



恥ずかしながら、今回初めて『海ほたる』内にある資料館に行ったのだが、海底シールドトンネルの建設に関しての技術紹介が事細かに解説されており、私自身も勉強になった。館内には写真、ビデオ、模型など視覚的

な説明ツールが多くあり、Jamie さんの理解を助けていたと感じている。

3.2 京急蒲田駅付近連続立体交差事業見学

京急蒲田駅の連続立体交差事業については、Jamie さんの専門が鉄道であり、また滞在中の家からも近いこともあって急遽企画して見学に訪れた。偶然にも、事業説明ブース(写真)を発見して見学したのだが、特に夜間における路線の切り替え工事の様子を示したビデオをずっと眺めていたのが印象的であった。

研修期間中には羽田空港の国際化についてニュースになっていたこともあり、よい機会だったと感じる。



3.3 大宮『鉄道博物館』見学

近年完成した大宮の鉄道博物館にも見学に行った。

車両の実物展示を利用した新幹線のジョイント部に関する説明会が丁度実施されており貴重な経験ができた。

新幹線の歴史や単線鉄道のタブレットに興味を持ったようで、長い時間、解説のビデオを眺めていた。



4. ホームステイと京都・奈良旅行

滞在期間中、Jamie さんは Nobu さんの実家に滞在していたため、実質的には毎日がホームステイとなっていたのだが、別のお宅にもということで、弊社の林慎太郎くん宅にホームステイを体験していただいた。

都内観光もあわせて実施してもらい、期間中に行った代々木公園は、緑が多く広い園内で多種多様な趣味を楽しんでいる日本文化に触れてもらい、非常に気に入ってもらったようである。

また、AJCE 主催の京都・奈良旅行に関しては、私が都合により参加できなかったため、弊社の桐生健志くん引率をお願いし、1泊2日の旅行に参加してもらった。

寺社見学等をはじめとして、楽しんでいただけたようで、参加できなかったことが非常に残念であった(、との写真を見て思いました)。



5. 研修に対する反省点・改善点

反省点・改善点として、コミュニケーション能力のさらなる向上と研修テーマ設定の具体化を挙げる。

まず、コミュニケーション能力に関しては、日常的な会話に関しては特に問題ないものの、技術者として、またコンサルタントとして、議論を交わす際の言葉の能力に関しては一層の改善が必要だと感じた。これは私たち日本側のコンサルタントとしての必要条件であり、よりよい研修成果を挙げるためにも一層の努力していかなくてはならない項目である。今回の研修でそれを痛感できたことは、私にとって非常に価値のあることであった。

次の研修テーマ設定の具体化についても、研修生は日本で何をしたいのか、我々がオーストラリア側に何を

伝えたいのかという全体像を明確にし、相互理解しておくことで、短期間で効率的な研修成果が期待できる。そのため、事前研修でのコミュニケーションが非常に重要であることはもちろん、過去の研修内容についても整理がなされ、双方が意識をもって研修に臨める環境づくりも肝要だと感じた。

6. おわりに

今回の研修の実施にあたりご協力いただきました、AJCE、社内外の各部門や関係機関の方、また、GHD社のNobuさんに、改めてお礼を申し上げます。

また、Jamieさんの丁寧でやさしい人柄もあり、滞りなく研修を終了できたことは、非常に感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、私達のような良きパートナー関係を築くことができる本プログラムの継続を願っています。

特集：日豪交換研修2009 報告

2009年 日豪交換研修生受入報告

株式会社オリエンタルコンサルタンツ GC事業本部 総合品質管理部
 神山 敦

1. はじめに

今回、我が社は豪州コンサルタントGHD社より2名の研修生を受け入れることとなった。GC事業本部においては、軌道開発部の主導のもと、Nobu Ito氏(以下“ノブ”と略)の研修を約3週間にわたり行った。

本項は、GC事業本部において実施した研修を中心に、受け入れ報告を行うものである。

2. 研修生のプロフィール

ノブは東京に実家を持つ生粋の日本人である。彼は高校卒業後に単身渡豪、クイーンズランド大学へ留学、2008年に卒業後、GHD社へ入社した。

GHD社でのノブは、鉄道の電気設備を専門としており、架線設備工事の現場経験を有している。

当然のことながら、日本の言語、風習文化、日本人の気質に精通しているという点で、これまでYPEPが受け入れてきた研修生と大きく異なる。

3. 社内研修の概要と成果

3.1 事前研修

メールによる研修生との意見交換を通じ、研修テーマ等に係る先方のニーズを把握したうえで研修プログラムを企画立案した。また、AJCEより与えられた以下の2

つの課題について、レポート提出を課した。

日本に関する基礎的な情報のまとめ
 鉄道分野全般に関する日豪の特徴の比較

3.2 社内研修

(1) 研修テーマの設定とレポート作成

研修全体を通しての研究テーマを課し、日常の移動中の観察や現場視察、インターネットを通じた情報収集などにもとづくレポートの作成を課した。

テーマは、4種類の軌間が混在する豪州と同様の状況にある我が国の「鉄道の相互乗り入れに必要な施策」についてである。ノブの専門分野である電気・機械設備の視点を中心に、設備仕様や軌間の異なる鉄道会社間での相互乗り入れ実現するための諸システムの導入経緯や現状について、設備・車両・運行の観点から考察した。

(2) 我が社の業務紹介

GC営業部の主催で、GC事業本部の代表的なプロジェクトについて紹介した。そのなかで、両国における公共事業やODAの展望、両社における営業活動や重点分野などの特徴、さらには豪州の公共事業における住民参加や資格要件について、意見交換を行った。

(3) QMS 研修

GC 総合品質管理部の主催で、我が社の品質管理システム(QMS)ならびに現場巡回活動などリスク管理活動について紹介を行った。また、設計基準や規格に関する両国の状況などについて、意見交換を行った。

4種類が混在する豪州の軌間を例にとると、宗主諸国の基準が持ち込まれた豪州の状況が、欧州諸国から基準を輸入した我が国に類似しているという点が興味深い。

(4) 若手意見交換会

研修生との交流、我が社の若手技術者の英語力研鑽を目的として、海外業務に高い関心を持つ13名の若手社員の参加を得て、意見交換会を実施した。



写真1 若手意見交換会 開催状況

英語に不慣れな若手技術者が気軽に、積極的に発言できるよう、飲み物付きの柔らかな雰囲気とした

まず豪側より、コンサルタント業界の動向や就業実態、多国籍のスタッフを統括していくうえでの課題の有無などについて発表し、その後、2グループに分かれてのグループディスカッションを行った。

就業時間や残業など、就労環境の大きな隔たり
 経済情勢が低迷傾向にある日本と異なり、特に都市部での社会資本投資が盛況であること
 閉鎖的な日本に比べてオープンなマーケット、多民族からなる職場内でも軋轢は小さいこと
 上司 - 部下間の密なコミュニケーション、定期的な意向把握、“Casual Friday”による交流

3.3 現場見学

研修期間中、関係機関のご協力のもと、3箇所の現場見学を行うことができた。

「京王線調布周辺連続立体事業」成田新高速鉄道線建設事業」の建設現場見学では、鉄道建設の現場に実際に立つことで、用地や工期、環境保全など、我が国独特の様々な制約下における施工上の留意点や技術的課題、また我が国の最新の施工技術を紹介することができた。

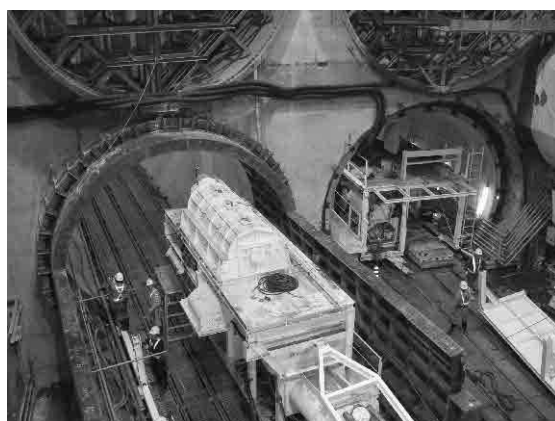


写真2 調布駅周辺連続立体交差事業 現場視察状況
 踏切閉塞による深刻な経済損失の解消と、駅周辺の再開発による地域発展を実現する大事業である



写真3 成田新高速鉄道線 現場視察状況
 厳しい工期の制約下での施工と、貴重な生態系の保護を実現すべく、施工技術の粋を集めた貴重な現場である

鉄建建設(株)に御協力いただいた「建設技術総合センター」の見学では、軌道の保守点検状況や安全設備を実寸で再現した屋外研修施設の見学を通じ、軌道の歪みや安全施設の操作、仮設桁の施工状態などを実体験するという、貴重な体験ができた。



写真4：建設技術総合センター(鉄建建設(株))視察状況
営業線近傍工事や安全設備の操作を実体験することができる、民間企業では国内唯一の研修施設である

このほかにも、東京湾アクアラインやスマートICの通行体験、多摩モノレール、地下鉄副都心線、都電荒川線など新旧様々な軌道交通の乗車体験を行った。

3.4 研修結果発表会

社内研修の総括として、研修の概要と得られた成果、体験した風習文化の違いなどについての社内発表会を

10月29日に開催した。社内から14名にご参加いただき、研修生によるプレゼンテーションの後、研修内容のみならず、豪州の建設事情やGHD社での若手育成制度について質疑が行われた。

4. おわりに

本研修の企画、実施にあたっては、社内の各部門や関係機関の数多くの方々より、多大なる協力を賜った。とりわけ、関係機関の御厚意により実現した現場見学は、研修生のみならず、同行した我々にとっても日本の先端技術に直に触れるまたとない機会となった。

運輸・交通分野に携わる技術者として、技術の研鑽、安全と品質確保の重要性を、国の違いを問わず再認識し合う、充実したプログラムであったと確信する。

最後に、本研修へ御協力いただいた社内外の全ての方々、ならびに多忙な業務の合間にプログラムへ参加していただいた全ての方々に対し、改めて御礼申し上げる次第である。

特集：日豪交換研修2009 報告

日豪交換研修生受入報告

株式会社建設技術研究所
東北支社河川部
瀧田 陽平

株式会社建設技術研究所
九州支社河川部
笠瀬 明日香

1. はじめに

この度、当社はAJCE2009年の日豪交換研修生プログラムとしてAustraliaのArup社からHilaryさん(以下ヒラリー)を受け入れることとなりました。研修の日程は、事前研修が6月から9月までの4ヶ月間、その後日本での研修が10月13日からの3週間という日程でした。受入れ期間中、東北支社(仙台)と九州支社(福岡)の両支社において研修を行ないました。

2. 事前研修

「日本とオーストラリアにおける河川計画論の違いについて」というテーマの下、河川砂防技術基準(英語版)を基に、両国の河川計画に関する基本的な手法についてとりまとめを行ないました。

3. 東北支社での研修

東北支社滞在は10月14日から21日までの合計8日間でした。東北支社での研修内容としては、お互いの業務に関するプレゼンテーション、現地見学等を行ないました。



プレゼンテーションの様子

【技術的交流】

業務紹介を通じて、河川、道路、地質、環境部門に関する技術的交流を行ないました。

【現場見学】

大久保遊水地、寒河江ダム、長井ダム等を見学しました。人口密度が低く、洪水自体もそれ程大きな災害として認知されていないことから、オーストラリアに遊水地は存在しないらしく、とても関心を示していました。



長井ダム見学の様子

【文化交流】

仙台での秋と言えば芋煮会です。ちょうど研修期間が芋煮会の時期と重なったことから、ヒラリーにも参加してもらいました。また、仙台名物牛タンも食べてもらいましたが、オーストラリアでは舌を食べる習慣が無いいためか、感想はイマイチと言っていました。

4.九州支社での研修

九州支社での研修日程は、10月21日～28日までの約1週間で、そのうちの2日間は、他の企業で研修され



Farewell Partyにて

ている技術者の方々と一緒に、京都・奈良へ向かいました。

【技術的交流】

九州での研修テーマは「水資源・水循環」でした。はじめに、熊本市を訪れ、市内を潤す地下水に触れたり、オーストラリアでは見ることのできない、阿蘇山の火口へ訪れたりしました。ヒラリーは地下から湧き出す水や、有毒ガスを放出する火口に大変興味を持っていました。次に、福岡市の海水淡水化センターを訪れた際には、オーストラリアには同じような施設があるものの、上水道の整備が不十分な地域が多々あることなど、福岡市とオーストラリアの違いについて指摘していました。



熊本 白川水源

京都・奈良研修では、清水寺、金閣寺、東大寺など、日本を代表するお寺を訪れ、日本の歴史を学びました。京都の町の造られ方、庭園の造られ方、社寺・宗教について、ヒラリーは大変興味を持っており、時折日本の文化について意見交換をしました。私も改めて日本の文化について学ばせて頂いたと思います。

【文化交流】

ヒラリーが初日から言っていたのが、「日本人は働きすぎだ」ということです。私たちは当たり前のように残業をしています、これは決して当たり前にするのではなく、仕事以外の時間をもっと大切にすべきだということを彼女に指摘されたような気がします。今の自分の仕事及び生活スタイルを見直してみようと思いました。

また、ヒラリーは積極的に日本語の習得に努めたり、食事もいろいろなジャンルに挑戦したりしていました。最も興味を示したのが、福岡市の観光地の1つ、中洲の

「屋台」でした。河川敷にたくさんの屋台が集り、そこに大勢の人が集って飲食をしている光景が大変面白かったようです。



奈良 東大寺



中洲の屋台

5. おわりに

この研修で海外の技術者と触れ合えて、技術者としての視野が広がったような気がします。このような機会がもっと多くの若手技術者に与えられることで、両国の若手技術者のよりよい育成に繋がること、そして、両国の益々の技術的、文化的な結びつきが強まることを期待しています。

特集：日豪交換研修 2009 報告

YPEPP2009 日豪交換研修に参加して

株式会社長大 東京支社
IT 計画部
澤部 純弘

株式会社長大 札幌支社
札幌技術部 主任
長谷川 正

1. はじめに

この度、弊社(株)長大はホストカンパニーとして日豪交換研修 2009(YPEPP2009)に参加させて頂き、10月13日～10月30日の約3週間の研修期間をもって豪州の Kellogg, Brown and Root 社より David Dixon 氏の研修受入を行いました。

本報告では、本プログラムにおける事前研修および弊社の札幌支社、東京支社における訪問研修期間中の研修内容について報告します。

2. 事前研修

5月からの約4ヵ月の期間に事前研修として E-mail を用いた事前研修を実施しました。事前研修では、お互いの自己紹介や、来日研修期間中のスケジュール、宿泊先の確認・調整、来日するまでの期間に実施する課題の提示等を行いました。

私事ではありますが、海外事業に興味があったことから本プログラムに参加させて頂きましたが、これまで会社や日常生活の中で英語のメールを送る機会が全く

なかった私にとっては、最初の自己紹介メールを送ることさえままならず、インターネット等を駆使してメールの書き方等を勉強し、何とか事前研修を開始することができました。

事前研修期間中は、受入企業側も研修生側も互いに業務の合間を縫ってのメールのやりとりとなったこともあり、なかなか頻繁にコンタクトをとれなかったことは残念でしたが、事前にお互いを知ることができ、来日後も気兼ねなく交流ができたことが、この研修の最も大きな成果といえます。

3. 来日研修

3-1. 札幌での研修(札幌支社受入担当:長谷川)

昨年、日豪交換研修に参加させていただいたこともあり、今回、札幌における研修生受入れの案内役を任せられました。このような経験は初めてなので、期待が少々、不安が沢山という感じが.....。



上手に箸を使う David

10月も中旬になると、北海道は結構冷え込んできます。新千歳空港に到着した David は思いの外軽装でした。札幌滞在は5日間と短期間ですが、「寒くないか?」と聞いたところ、「寒い」との返答でしたので、少々不安を感じました。

受入れ初日、David が現金の引き出しをしたいとのことでしたが、国際カードでは、銀行では対応不可、郵便局では上限が非常に厳しいということで、David に苦勞をかけさせてしまいました。(結局、コンビニエンスストアの ATM が対応していました)

札幌支社での研修としては、ITS チームで作成した資料によるプレゼンテーションおよびディスカッションへの参加と、橋梁の原位置試験の立会に参加してもらいました。

橋梁の原位置試験は、床版の劣化を判定するために削孔を行い、試料を採取するものですが、現場が道東の山の中であったため、札幌～釧路間を飛行機移動、

釧路～現場～旭川をレンタカー移動、旭川～札幌を JR 移動で、札幌出発が 7:50、札幌帰着が 19:20 と、かなりの強行軍となってしまいました。



鉄建建設(株)への現場見学

長い移動でしたが、David は鉄道および交通の技術者であることから、移動途中で立ち寄った廃線となった鉄道駅跡(鉄道車両が残る公園)や、原位置試験を行った橋梁に設置されていた落橋防止装置に強い関心を示していました。

また、レンタカーで借りたプリウスは、オーストラリアでも人気があるようですが、燃費の良さに驚いていました。(約 300km 走ったのですが、燃料の表示はほとんど変化無しでした)

週末は、札幌近郊の観光として、小樽～余市～積丹の小旅行を企画しました。小樽はワイン、地酒も有名な所で、試飲が出来る店も多くあります。David も何種類か試して、ワインと日本酒を 1 本ずつ購入していました。

余市の海鮮丼が有名な店で食事をし、メインの積丹岬へ。小さなトンネルをくぐると、「積丹ブルー」と呼ばれ



積丹岬

る綺麗な海が広がります。オーストラリアの雄大な自然とはまた違う風景、Davidはどのように感じたでしょうか？

滞在期間が短かったことありますが、研修期間を通じてDavidと交流した社員が少なかったことが、少々残念でした。

3 - 2 . 東京での研修(東京支社受入担当:澤部)

東京支社での研修では、首都高速(株)西東京管理局の交通管制室、東日本高速道路(株)関東支社の交通管制室の見学に参加してもらい、また、(株)オリエンタルコンサルタンツ様で企画された成田高速鉄道の建設現場、鉄建建設(株)の研修センターへの見学会にも参加させて頂きました。

社内の研修では、「日本とオーストラリアにおけるITS技術の比較」をテーマにしたプレゼン発表を行ってもらい、発表後には長大社員とのディスカッションを行いました。

長大社員もはじめは日頃英語に慣れていないせいか少々戸惑いもありましたが、会話の内容がETCやVICSなど自分たちが得意とする専門分野の話になると、積極的に質問を行う姿や、日本のシステムを熱く語る姿も見られ、Davidとともに大変有意義な意見交換を行うことができました。

4 . 終わりに

私にとって海外研修生の受入担当という役割も初めての経験であったこともあり、事前に企画した研修の内容をDavidが喜んでくれるか等、色々な不安もありましたが、3週間(東京でDavidと一緒に過ごしたのは2週間でしたが)の研修期間を振り返ると、あっという間だったというのが今の率直な感想であり、私自身も彼と一緒に大変貴重な時間を過ごすことができたことを心から嬉しく思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて頂いたAJCE、ACEA各協会の皆様、ならびに本研修に参加させて頂いた(株)長大の皆様には厚く御礼申し上げます。

また、現場見学会に参加させて頂くにあたり、神山さんをはじめ(株)オリエンタルコンサルタンツの皆様には大変お世話になりました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。



社内でのディスカッションの風景

特集：日豪交換研修2009 報告

ヤングサミット

株式会社オリエンタルコンサルタンツ GC事業本部社会・経済基盤開発部 課長
AJCE技術研修委員会 技術研修推進分科会 浅田 薫 永

1 .はじめに

2009年度の日豪交換研修の最終公式行事である「ヤングサミット」が、10月30日(金)に(株)オリエンタルコンサルタンツ会議室にて行われた。来日された4名の研修生と、受入企業等からの若手技術者約20名が会し、研修成果の発表、日豪の若手技術者による「テ

ーブル・ディスカッション」、FIDIC-YPFの紹介など次頁の次第で実施した。

各研修生からは、それぞれ15～20分程度、研修の内容やそこで得た経験などがプレゼンテーションされた。その後、受入企業のメンターから、研修生に対する感想・今後の希望などが述べられた。

| | |
|-------------|---|
| 日時： | 2008年10月30日（金） |
| 場所： | （株）オリエンタルコンサルタンツ |
| 13:30-13:50 | Opening Address |
| 13:50-15:20 | Reporting of YPEP 2009 研修生4名+メンターからのコメント |
| 15:20-15:35 | コーヒープレイク |
| 15:35-17:10 | テーブル・ディスカッション （2テーマ、3グループ） |
| 17:10-17:20 | FIDIC-YPF, AJCE-YPGの紹介 |
| 17:20-17:30 | Closing Address |
| 18:00-20:00 | 懇親会 |



研修生の発表とメンターからのコメント

以下からは、テーブル・ディスカッションの内容とその結果について報告する。

2. テーブル・ディスカッションのテーマ

昨年までの研修生より得たアイデアと、最近のFIDIC等の若手技術者間で話題となっている内容をふまえ、2つのテーブル・ディスカッションのテーマを設定した。

| | |
|------|---|
| テーマ1 | 自分にとってのコンサルティング・エンジニア（CE）とは？ What is the “CE: Consulting Engineer” for your carrier & life? |
| テーマ2 | 会社 / 上司によるキャパシティ・ビルディング（人材育成）に何を求めるか？ What is the better way for your “Capacity Building” by mentoring, coaching from senior staff or training activities? |

実施にあたっては、研修生4名とわが国の参加者の間での自由な討議となるよう、3つのグループに分けた。テーブルごとの司会は、有志の方をお願いし、各テーマ

30分ほどの時間を取って、用意したホワイトボードを活用し、意見交換をおこなった。その結果は、テーブルごとに発表して頂き、意見の共有を図った。

前半はグループごと2名の研修生を配置し、研修生による進行、意見のとりまとめ・発表とした。なお、これらは全て英語で実施した。

以下、議論の内容、意見等を報告する。

テーマ1：自分にとってのコンサルティング・エンジニアCEとは？

Topic-1: What is the “CE” for your carrier & life ?

- Why did you choose the job of “CE”?
[Dream]
- How about the image of “CE” now?
[Reality]

What are you trying self-development for your capacity building?
What is the attraction/ motivation of “CE”?

テーマ1は、以下の4項目について、自分自身を振り返りながら、考えを出し合ってもらった。

- 何故CEという職業を選んだのか(当初の思い=夢)
- 数年働いた現在、CEという職業をどの様に考えているか(当初の思いとのギャップ=現実)
- 現在、自分自身で努力していることはなにか?
- CEという職業の魅力はなにか?



ホワイトボードを活用したテーブルディスカッション

各グループからは、次表の意見が出された。

発表の中では、「そんなに厳しい職場環境ならば、オーストラリアに移住したら？」といった提案も出された。

| 項目 | 出された意見 |
|-------------------------|---|
| CEを選んだ理由 当初の思い =夢 | 幼少期の洪水体験が、これらを防ぐ土木技術に興味を持つきっかけとなった。 社会・地域に貢献できる職業と考えたから。 特に考えていなかった。 |
| CEの現実 (ギャップ) | マニュアルだけではない、創造的な検討をする能力が必要であることが分かった。 常に新しい知識の取得が必要な挑戦ができる職業である。 時間的・精神的なプレッシャーがある職業である。 就業(残業)時間が多い(組織・構造的な問題である)。《日本側のみ》 |
| 努力している内容 | ランチタイムに20人ぐらいで集まって議論をする会を催している。 |
| CEの魅力 | 達成感がある仕事、大規模プロジェクトに従事できる、社会貢献ができる仕事 |



テーブルディスカッションの結果を発表

テーマ2：会社 / 上司によるキャパシティ・ビルディング(人材育成)に何を求めるか？

Topic-2: Expectation to your firm for your "Capacity Building"

● Who Mentoring? Source: Presentation by CE in South Africa, Young Professionals "Open Forum" FIDIC-2009, London

カール、お前はクビだ やること、なすこと、全く
やらない
やめる前に、お前の仕事のやり方をディルバートに
教えておいてくれ

- Your Company Policy for staff mentoring, coaching and training activities
- Enforced activities, Is that effective?
- What is expected from Senior Staff/ Manager, mentoring, coaching?
- How to mentor/ coach to YP in future?

テーマ1で自分自身のことを語る機会があったこともあり、2つ目のテーマでは、比較的にリラックスして意見交換ができたようである。

具体的には、若手技術者の育成・指導に関する彼ら自身が感じる現状の問題・課題点を、将来、指導する立場となったときをイメージしながら、意見を出し合ってもらうことにした。

予定していた時間を、若干延長しながら、できる限り多く、グループ内で意見を出し合えるような時間を取ることができたと思う。

以下は、このテーマに対する各グループで出た意見の代表的なものである。

| 項目 | 出された意見 |
|----------------------------|--|
| 会社における人材育成の方針 | 新卒対象のメンター・プログラムが用意されている(6つのモジュール、2年間)。2年後も、各自必要と思うプログラムを選択受講することができる。 メンターが定められており、質問紙、自由に聴けるなどの体制を用意している。 日本は、「教えられる」というのではなく、経験・技を「見て盗む」と考えている人がいる(オーストラリアの人には理解できないようでした)。オーストラリアでは、会社とは別の組織のFuture Netという若手技術者交流組織が存在する。 |
| どのような教育・指導を求めるか・将来自分が実践するか | 技術だけでなく様々なことを相談できるような環境としたい。 若手の仕事を減らして、人材育成・自己啓発できる時間を増やしてほしい。 知識の共有ができる仕組みとすることが望ましい。 女性が働き続けることがし易い仕組みとしてほしい(残業軽減、産休、育休など)。 |

短い時間ではあったが、日豪の若手技術者がそれぞれの考え、問題点、悩みなどを共有できたことは、お互いのこれからの交流を続けるうえで、有益な機会であったと思う。

3. おわりに

テーブル・ディスカッションに続き、AJCE 国際活動委員会 中島隆志氏より、FIDIC-Young Professionals Forum(YPF)の概要とFIDIC ロンドン大会で発表された他国における若手技術者の活動の状況について発表された。今後、それぞれの国の若手技術者の活動を進めていく上で、参考となっていたいただければと思っている。

最後に、AJCE 側より、今回の研修およびこの会はあ

くまでもはじめての一步であり、継続的および発展的な人的交流を進めていくことと、その結果として、いつかどこかで日豪の技術者が一緒に仕事をできることを目的に、お互い切磋琢磨しくことを確認して閉会とした。忙しい中、参加いただいた皆様に感謝したいと思う。今回の経験で感じた、疑問点・他国との違いが生まれる要因・背景などの深い分析を継続して問い続け、我々CE自らが行動・改善すべき方向を見出していけるよう、各自で努力していけたらと考える。

Young Professionals Group (YPG)としても、今後とも、このような議論の場、交流(ネットワーキング)の場の提供を考えていきたいと考えている。



Young Summit 参加者

シリーズ・FIDIC 会員協会の紹介 第2回

オーストラリア・コンサルティング・エンジニア協会 (ACEA)

広報委員会 編

第1回のカナダ・コンサルティング・エンジニア企業協会に続き、今回は、日豪交換研修でAJCEとも旧くから馴染みの深い、オーストラリア協会(ACEA)についてご紹介いたします。

1. ACEA の使命

ACEA(Association of Consulting Engineers Australia) は、オーストラリア国内初のコンサルティングエンジニアリング企業協会として、CE 産業の事業利益を促進および保護するため、1952年に設立された団体である。

2. 活動目標

- ・会員企業の事業実施における法的環境の整備促進
- ・CE 産業における能力開発
- ・CE 産業の普及・会員企業の活動推進
- ・協会の運営維持および基盤強化

3. 組織(2009 年 11 月現在)

- ・協会本部: シドニー 支部: 8州に設置
- ・ACEA 役員: 会長他 24 名(2008 ~ 2009 年) 会長: Paul Reed 氏
- ・会員企業: 約 270 社(建設・構造・地質・経営工学・機械・電気・化学・エネルギー・都市交通・環境・上下水道・建築・IT 通信等の分野)

4. 財政

協会の事業収入(2008 年度)は、353 万豪ドル(約 2 億 8,770 万円)で、年会費(58 %)、協会行事(26 %)、広告・協賛(12 %)他。事業支出は 372 万豪ドル(約 3 億 318 万円)。

5. ACEA のおもな活動

- ・オーストラリア国内の CE 業界を代表し、国および州の政府、その他の産業界に対して意見、要望を提出
- ・テーマ毎に円卓会議を設置。テーマは以下の 8 つ:
労働安全衛生 スキルと資源 契約と責務
実践と調達 持続可能性 経済と税制 インフラ整備 国際
- ・ハイレベルな会議などのイベントを主催あるいは参加し、CE 業界の周知を促進

- ・教育研修プログラムの実施。現在は設計における安全性、コンサルタントのための契約、持続可能な建築設計の 3 プログラムを実施中。
- ・商工会議所、建設産業界等さまざまな業界団体との緊密なネットワークの形成・維持。
- ・さまざまなメディアを活用した広報活動や教材の作成・発刊
- ・CE 業界に関するレポートの作成・発刊
- ・会員企業に対する海外事業の機会の紹介・斡旋
- ・州を基本とした 8 つの地域毎にセミナー開催など地域独自の活動も実施

6. AJCE との関わりについて

アジア太平洋地域を代表する ACEA と AJCE は、古くから協力関係にある。1994 年 FIDIC シドニー大会において、日豪両 CE 協会の間で協力覚書(MOU)を交わりたい旨、豪州側から申し入れがあり、翌 1995 年 10 月 14 日、東京で調印式が行われた。なかでもこの覚書に基づき翌 96 年から始まった若手エンジニアの交換研修制度は、相互の国を数週間に亘って訪問し、お互いの国の技術やビジネススキル、文化を学ぶとともに人脈構築などを通じて将来のビジネス展開を目指した研修として、好評裡に今日まで継続されている。その詳細は、本誌特集でも紹介している。



ACEA の Website <http://www.acea.com.au/>

FIDIC 会員紹介 バックナンバー

- | | | | |
|-----|---------|-------------|-------------|
| 第1回 | カナダ | Vol.33 No.1 | 平成 21 年 7 月 |
| 第2回 | オーストラリア | Vol.33 No.3 | 平成 22 年 1 月 |

シリーズ・海外だより その3

シリアのファーストフード

株式会社日水コン 海外事業部技術部

主任 木村光志

現地でOJT中の筆者

1～3ヶ月のシリア出張を繰り返している。ホテル暮らしが続くと、当然ほとんどの食事を外食に頼ることになる。シリアでは、レストランと言えどどちらかという高級店が多く、イタリアンや中華、和食も食べることができる。一方、日本で言う“定食屋”的な気軽に毎日利用するような存在があまり無く、長期滞在時には結構不便な面もある。そこで多めに利用することになるのがファーストフードである。

シャワルマ（日本ではカバブとかケバブとか呼ばれているようだ）は、シリアでよく見かけるファーストフード。電熱器で炙った鳥肉、または羊肉をパセリのような野菜、ピクルス、サワークリームと一緒にホブス（ナンのような薄いパン）で巻いたもの。羊肉のイメージが強いが、鶏肉の方がポピュラーで、値段も3割くらい安い。慣れないうちはピクルスの塩味が強過ぎたので私は抜いてもらっていた。もとはトルコの料理で、シリアのオリジナルではない。



シャワルマの値段はシリアに行くたびに上がっていった。2005年は40円でも買えたが2年後には70円が普通になった。イラク難民増加に伴う物品の欠乏物価の値上がり、という話だったが純粋な経済成長に伴うインフレもあるのだろう。

ファラッフェ（大豆が元の揚げもの、コロケに少し似ている）も同様にホブスで巻いて食べる。これも日本人には好評。シャワルマも同様だが、店によって中身が違うのでいくつも試してみる楽しみが

ある。これも2040円くらい値上がりした。

ファッティルは日本でいうピザパンに似ているものだが、種類が多いので数日続いても飽きにくい。味付けもくどくなく、日本人の味覚にも合う。1枚10円～30円、腹具合と気分に合わせて頼めるので非常に便利。オーダーすると、釜から焼きたてをくれるか、予め軽く焼いてあるものを再度釜に入れてアツアツにしてくれる。



シリアの代表的な食べ物としてシャワルマが挙げられる傾向があるようだが、利用者や店舗の数を見ているとこちらこそシリアのファーストフードの王道だと思えてくる。

現在私は日本でこの記事を書いている。いま、次回シリアに行ったらあれを食べよう、これを食べよう、とシリアンフードが私の頭の中をぐるぐる回っている。



シリーズ・こだわりの会員

イギリスと日本の鉄道の今昔を考える

田中宏技術士事務所 代表

AJCE 理事 技術交流委員会副委員長 田中 宏

FIDIC - 2009年ロンドン大会に参加して、多彩な行事の中でイギリスと日本の鉄道の今昔を考えた。

来賓の真白いスーツ姿のアン王女は、産業革命発祥地のイギリスで催されるこの大会の今日的な意義と今後の持続可能な発展にかかわるエンジニアリング・コンサルタントの役割の重要性についてお話をされた。



FIDIC - 2009でのアン王女（筆者撮影）

メイン・ゲストのクリス・モール英国交通大臣からユーロスターやロンドン・オリンピックの輸送対策について講演があった。

この講演に少し資料などから補足すると、2007年11月にロンドンからユーロトンネル入り口までの高速鉄道が開通し、ロンドンの発着駅をウオータールー駅からセントパンクラス駅に変えてホームも全面ガラス張り屋根とした。ユーロスターにより、ロンドン パリ間が2時間15分、ロンドン ブリュッセル間も1時間54分となった。また、2009年10月に、この高速線の途中から在来線に乗り入れる新在直通運転（日本で言えば、山形新幹線に相当）が始まり、この輸送には日立製作所の高-speed車両 Class395系が使用されており、現

地では「日本の新幹線がやってきた」と報道された。日立は運行やメンテナンスも含めたフルターンキーで契約を行ない、2012年のロンドン・オリンピックの会場となるストラットフォードまでのシャトル輸送にもこの車両を使うことが決まった。



イギリスを走る日本製の高-speed電車
(日立評論2007年11月号から)

ところで、明治維新の2年後、イギリス土木学会会員のエドモンド・モレル氏はわが国に招聘され、新橋と横浜間の鉄道計画書をつくり、建設の指導をした。それこそ今で言うフルターンキーで、イギリスからレール、機関車、客車、信号機などが輸入され、営業開始後はイギリス人機関士が運転をした。モレル氏は「日本の技術者の恩人」と言われているが、一つには国産の材料を積極的に使用することを勧め、二つには将来のために技術者の教育機関の設立を提言し、工学寮 工部大学校（東京大学工学部の前身）の創設を助言していたからである。日本製の高-speed電車がイギリスの首都を走っている140年後の姿を、横浜の外人墓地に眠るモレル氏が見るとすれば、随分と驚くことだろう。

本シリーズは「こだわりの会員」と題して、技術士事務所などを経営している会員の皆様から、専門分野の紹介、コンサルティング業への期待や建設的意見、業務受注や生産方式、プロジェクト紹介、座右の銘や趣味等々、自由に投稿いただくという企画です。様々な分野でご活躍をされているこだわりの会員をご紹介しますのでご期待ください。

国際活動委員会

FIDIC ニュース 2009 年 10 月号抄訳

訳責：国際活動委員会 IFI 分科会

A . 活動(FIDIC -Activities)

A.1 FIDIC ロンドン大会の焦点は気候変動(FIDIC Conference highlighted climate change)

第 15 回気候変動枠組条約締約国会議(COP15)のコペンハーゲンでの開催をわずか数週間後に控えて、2009 年 FIDIC ロンドン大会が 9 月 13 日から 16 日にかけて開催された(www.fidic2009.org 参照)。同大会は、英国のアン王女の挨拶で幕を開けた(写真)。今回の FIDIC 大会は、世界中のコンサルティングエンジニアが「目標を達成するための解決方法を見いだす手助けをする用意がある」ことを念頭に、実行可能な合意がなされるように世界中の指導者に要求することを目的とした。参加者は、FIDIC とそのメンバー協会やコンサルタント会社に地球規模の課題にこれまで以上に取り組むよう、声を上げるよう、また、やがて持続可能となる解決策に導くより良い方法を見出すよう強く求めた。



一方で FIDIC は、Ban-Ki-moon 国連事務総長に書簡を送り、COP15 締約国首脳会議で証言するための招待を要請し、そこでの合意は単に CO₂ 排出量削減目標だけでなく、気候変動を緩和し、適用できる意味のある行動についてもなされるべきであることに言及した。

B . 事業展開(Business-Development)

B.1 グリーンビルディング格付システムは気候変動指標に集中(Green rating systems converge on a climate indicator)

最近の詳細なレビューは、「米国グリーンビルディング協会(USGBC)の LEED グリーンビルディング格付シス

テムは、測定可能な重要な分野、すなわち温室効果ガス(GHG)及びエネルギー分野をリードできなかった。」と結論づけた(PDF)。これらの分野は正に FIDIC が活発に活動している分野であり、国連環境計画(UNEP)の持続可能な建築物及び気候変動イニシアティブの SBCI インデックス及び国際標準化機構(ISO)の持続可能な建築基準が取り扱っている問題である。両者ともに、建築物供用中のエネルギー消費削減が地球温暖化 GHG 削減を進める上で最も費用対効果が高いと論じている。加えて ISO は建築物へのアクセスも考慮すべきとしている。種々の基準をベースにした GHG 評価基準指標についての収束がみられる。

一方、USGBC は、FIDIC が創立メンバーである「持続可能な建築アライアンス(SB アライアンス)」に加入した。このアライアンスは建築物に関する 7 つの国家評価システムの測定の基準化を行うことを目的としている。

C . 実務(Business-Practice)

C.1 GHG 協定及び基準統合の必要性

(GHG protocols and standards need integration)

2009 年 FIDIC ロンドン大会及び同大会で公表された「FIDIC 世界のインフラ白書 2009 年版

FIDIC 世界のインフラ白書 2009 年版
注文コード：IN-1
会員価格 6,825 円
一般価格 8,400 円
- 現在日本語版を作成中 -



(www.fidic.org/infra 参照)は共に気候変動がコンサルティングエンジニアにとって中心的緊急課題であるという点に焦点をあてているが、これに関する一つの重要な側面は、ISO 規格が種々の課題に取り組んでいる方法である。ISO 総裁 Rob Steele は、2009 年 7 月東京に

この抄訳は IFI 分科会の若手サブメンバーの翻訳を分科会で監修したものです。

AJCE のホームページ(http://www.ajce.or.jp)には FIDIC ニュースのほぼ全訳を掲載しています。

において、ISO14000 環境管理シリーズが、GHG の定量化、検証及び認証(verification and validation)に関して、どのようにして ISO14064 規格によって補完されるかについて語った。

世界資源研究所及び持続可能な発展のための世界経済人会議(WBCSD)によって開発された GHG プロトコル(GHG Protocols)のような自主的な GHG 算定・報告基準及び近々発表される ISO 規格は、「コンサルティングエンジニアが、国家、組織、施設及び製品/サービスの各レベルで GHG の算定と報告をうまくできることを期待する」であろう。それらの統一には、おそらく一つのプロトコルあるいは規格を必要とし、そのレベルこそ、FIDIC が積極的に活動することを目指すところである。

D . 契約約款(Business-Contracts)

D.1 FIDIC 会長認定紛争裁定人リスト新規登録者決まる (Adjudicators gain entry to the FIDIC President's List)

英国から 11 名、ドイツから 2 名の合計 13 名の候補者が、FIDIC 会長認定紛争裁定人リストへの登録に必要な厳格な条件に合格した。リストへの登録には、国際的紛争解決と FIDIC 契約約款について適切な経験があるかどうかの事前評価に加え、FIDIC 裁定人評価委員会によって開催される 2 日間にわたる裁定人評価ワークショップでの評価に合格する必要がある。次のワークショップは、2012 年中頃に開催される見込みである。

E . 協会活動(Industry-Representation)

E.1 4 カ国が FIDIC に加盟(Four countries join FIDIC)

ロンドンでの 2009 年 FIDIC 総会で新たにレバノン、クウェート、セルビア、スーダンの 4 協会が FIDIC 会員として承認され、FIDIC に名を連ねる国は 84 となった。写真は、VBI ドイツ会長 Volker Cornelius とともに写ったセルビア代表団(左から Milos Svarc 会長、USAID の Anna Trbovich、Zoran Djordjevic 副会長)である。



F . イメージ(Industry-Image)

F.1 地域会議の計画が進行中(Planning for regional conferences underway)

2010 年 FIDIC GAMA アフリカ会議は、「戦略パート

ナーとしてのコンサルティングエンジニア」をテーマとして、3月14日から17日にかけてケニアのモンバサで開催される(詳細は www.fidic.org/gama)。



2010 年 FIDIC ASPAC アジア太平洋会議は、2010 年 FIDIC ニューデリー大会(9 月 19 - 22 日、www.fidic2010.org)をアジア地域で強く支援するために、延期された。ASPAC の総会と他の行事は、FIDIC 大会期間中に開催されるであろう。2009 年の FIDIC 総会で日本の廣谷彰彦現 ASPAC 会長(写真)が FIDIC 理事に選出された関係で、新しい ASPAC 会長と交代する協議が進行中である。大会は「革新をマネジする - 前へ進むために(Managing Innovation-The Way Forward)」をテーマに開催される。

G . 倫理(Principles-Ethics)

G.1 公正性チャンピオンへの Prangey 賞(Prangey Award for integrity champion)

世界銀行、アジア開発銀行、米州開発銀行などは腐敗行為を行った者のブラックリストを作成しているが、その作成だけでは根本から腐敗行為に立ち向かうわけではない。FIDIC は、11 月初旬にギリシャで予定している開発銀行の調達責任者との会合で、反腐敗問題の論議を続けることになる。FIDIC は供給側の制裁処置だけではなく供給側の反腐敗対策、特に FIDIC ビジネス公正管理システム(BIMS)の普及も求めている。

メキシコの Felipe Ochoa Rosso 博士(写真)は、長く FIDIC の活動に貢献している公正管理の第一人者であり、BIMS ガイドラインと政府調達機関の協力者への中心的な貢献者である。2009 年 FIDIC ロンドン大会で、コンサルティングエンジニアリング業界と FIDIC に対する長年の価値ある貢献に対して授与される当業界における主要な賞、FIDIC Prangey 賞が博士に授与された。



H . 持続性(Principles - Sustainability)

H.1 建築物証明の改善を勧告(Report recommends improvements to building certification)

非政府組織である米国建築科学会(NIBS : The US National Institute of Building Sciences)は、好ましくない建

建築物の格付け及び証明書発行のまん延を克服するために、行動をとるように推奨している。それらは、商業的な動機によるもので、すべての関係者に対してリ



スクと責任を増大させる。FIDICは、特に、建築物証明に関してコンサルティングエンジニアがその必要性に関して良く知っていること、そしてその能力を確実に身につけるベストプラクティスを普及させること、FIDICプロジェクト持続性管理ガイドラインで明示されたプロセスと一般的な必要条件を満たすことを保証する「点数付け及び認証システム」の開発者と協働すること、またそれらのガイダンスを造ることなどで、これらの分野で活発に動いている。

持続可能なプロジェクト及び建築物証明に関するリスクと瑕疵責任の問題は、2010年FIDICニューデリー大会をリードする予定の注目テーマである。そこでは「プロジェクト持続性管理におけるリスク対処法の革新」に関する複数のセッションを予定している。

I. 行事 (Announcements-Events)

I.1 FIDIC の会議及び国際訓練プログラム (FIDIC Conferences and International Training Programme)

< HP 参照 >

I.2 FIDIC ロンドン大会で UAE の紛争解決に脚光 (Conference highlighted UAE dispute resolution)

FIDIC のライセンスに基づいて修正した FIDIC 建設契約約款とその解説書は、湾岸地域の主なインフラストラクチャ投資家に、UAE における契約条件書の選択肢を与えた。世界金融危機もあるが、極めて多数の契約約款が紛争解決委員会条項を削除していたことで、裁定の数が劇的に増加した。この状況から、法律上の枠組みが強化される見込みが高く、UAE の法廷に変化の兆しが出ている。2009年9月のドバイ友好的紛争解決センターの設立を反映し、FIDIC の紛争解決手順の適用に対する支援が増加していた背景がある。

J. 報告 (Announcements - Notices)

J.1 新しいメンバーが世界中から選出された (New members elected from around the world)

2009年9月16日FIDIC総会(GAM)において、アメリカのスタンレーコンサルタント社会長及びCEOである

Gregs Thomopoulos(写真上)が、FIDIC 会長として選出された。同時に、英国の Scott Wilson 社会長 Geoff French(写真下)が副会長として、廣谷彰彦(オリエンタルコンサルタント社長、日本)、Bisher Jardaneh (Arabtech Jardaneh 社専務、ヨルダン)、Jae-Wan Lee(Sekwang エンジニアリングコンサルタント CEO 及び会長、韓国)が新理事として選出された。



J.2 各国のメンバー協会会長がFIDICの理事と会合 (Associations met with the FIDIC Executive Committee)

2009年FIDICロンドン大会の直前に開催されたFIDIC年次会長会議で、およそ36カ国の会員協会会長がFIDICの理事と会合した。目的は、FIDICが採配したか、あるいは援助を必要とした問題の最初の手を知るためである。FIDICの地域戦略について、特に研修の分野における地域グループとのより密接なリンク及びFIDICの地域での露出度拡大を含めて、さらに詳細に議論された。また、FIDIC事務局の可能な構造改革について説明された。



J.3 FIDIC 理事会はヨーロッパでの代表性と戦略に注目 (Executive focused on representation and a strategy for Europe)

理事会の重要な議題は、コンサルティングエンジニアリング産業の5カ年ビジョンの継続的な発展であった。それは、各国を代表するメンバー協会の代表性強化と、他の産業部門の主要なグループとのより大きな相互作用を通じて行うものである。

J.4 FIDIC2010 若手専門職管理者研修プログラム開始 (FIDIC 2010 Young Professionals Management Training Programme launched)

2009年FIDIC若手専門職管理者訓練計画(YPMTP)の22名の参加者が、大会直前のセッションでプログラムを完了し、FIDIC会長John Boydから証明書を受け取った。2010年のYPMTPは2010年1月中旬に始まり、2010年FIDICニューデリー大会のセッションで終了する(参照: www.fidic.org/ypmtp)。

シリーズ・FIDIC 契約約款の紹介

その3 FIDIC Gold Book

AJCE 事務局

FIDIC の契約約款は、その対象に応じて表紙が色付けされ、Red Book, Yellow Book, Silver Book など表紙の色で呼称されており、まとめて『FIDIC レインボー』と呼ばれています。シリーズその1では『FIDIC レインボー』の内容を、シリーズその2では解説書(ガイド)についてご紹介しました。

今回は FIDIC 契約約款『FIDIC レインボー』シリーズ最新版『設計・施工・運営一括発注(契約)方式の契約条件書 2008 年 第1版』(通称: DBO Gold Book)をご紹介します。

Gold Book は『プラント及び設計・施工の契約条件書 1999 年 第1版』(New Yellow Book)に Operation(運営・維持管理)を付加したものですが、New Yellow Book が出版されてから 10 年が経過したため、その間の使用実績や時代のニーズを踏まえた見直しが行われています。

Gold Book は、他のレインボーシリーズと同様、一般条件(General Condition)、特記条件(Particular Conditions)及び入札状、契約合意書及び紛争裁定合意書の様式から構成されています。

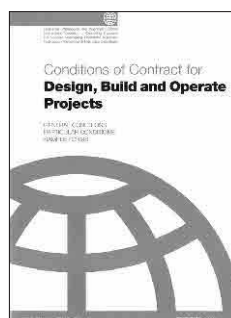
Gold Book では、設計/計画、施工/建設、運営/維持管理の各段階で、紛争裁定のための DAB(裁定委員会: Dispute Adjudication Board)が設置されます。裁定人は事業規模により1人又は3人とされていますが、施設の運営・維持管理段階では裁定人は1人とされています(任期は5年、必要に応じ延長可能)。運営・維持

管理期間中は、独立した監査・コンプライアンスを実施する監査人(Auditing Body)が委嘱されます。

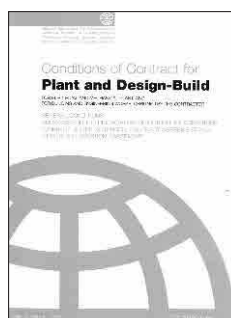
Gold Book には、他の契約約款には見られない新たな用語が使われています。特に運営・維持管理に関するものが多くあります。これらの幾つかをあげると、Contract Data(特記条件 A に発注者が特記した事項)、Commissioning Period(設計・施工終了後に施設の機能をテストする期間)、Commissioning Certificate(Commissioning Period のテスト終了後に発行される証明書)、Retention Period(Commissioning Certificate 発行後1年間)、Cut Off Date(Contract Data に特記された期間の終了日、設計・施工終了日)、Exceptional Risk(プロジェクトにおいて関係者が予測・回避不可能なリスク)等。

シリーズ FIDIC 契約約款紹介は今回で終了しますが、FIDIC 契約委員会は 2009 年、『建設工事の契約条件書 1999 年 第1版』(New Red Book)、New Yellow Book、『エンジニアリング・資機材調達・建設までのターンキープロジェクト契約条件書 1999 年 第1版』(Silver Book)の改訂作業に着手し、2010 年頃には改訂版が出版される予定です。その機会をとらえて再度 FIDIC 契約約款の紹介を行いたいと考えております。

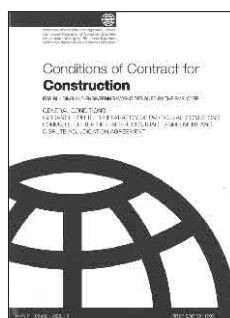
FIDIC・AJCE 出版物一覧と「FIDIC 契約約款の紹介」バックナンバーを AJCE ホームページに掲載しております。http://www.ajce.or.jp/book/book_fidic.htm



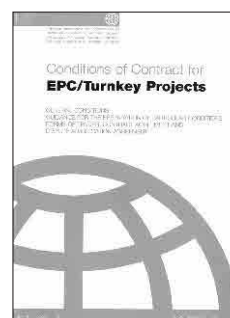
DBO Gold Book 2008 年
コード CO-24



New Yellow Book 1999 年
コード CO-2



New Red Book 1999 年
コード CO-11



Silver Book 1999 年
コード CO-10

日中韓3協会首脳会談

AJCE 事務局

2009年10月14日、韓国ソウル市内の国際会議場にて、(社)日本コンサルティング・エンジニア協会(AJCE)廣谷彰彦会長、中国コンサルティング・エンジニア協会(CNAEC)Tang Ping事務局長、韓国コンサルティング・エンジニア協会(KENCA)Hun-Il Moon会長の3首脳会談が開催されました。



前列右から廣谷会長、Moon会長(韓国)
Ping事務局長(中国)

会談では、日中韓3協会が更に連携を促進させ、FIDICアジア太平洋地域会員協会連合(ASPAC)を基盤に、同地域におけるコンサルティング産業の育成・振興を図ることを確認しました。近年FIDICにおけるASPACの役割は重要度を増しており、日・中・韓3協会の連携・促進はASPACの推進役として期待されています。今回の首脳会談の主催者

KENCAのMoon会長は、3首脳会談の継続的な実施を通して、事業機会と技術交流の促進を図りたいと述べました。また、2012年韓国ソウル市で開催されるFIDIC大会の成功に向け、1991年FIDIC東京大会の開催国であるAJCE及び2005年北京大会の開催国であるCNAECの支援を要請しました。2006年9月から2009年9月の3年間に亘り、ASPAC議長を務め、2009年9月からFIDIC理事に就任した廣谷AJCE会長は、3協会の連携はASPAC地域内のコンサルティング(CE)産業の発展と活性化に不可欠であり、3協会の連携を核にASPAC活動の活性化に尽力したいと表明しました。さらに、将来のCE産業の担い手である若手技術者の育成と確保が喫緊の課題であること、そのためにはCEが魅力ある産業として社会的地位を得るべく、連携を促進・発展させてゆきたい、と述べました。

会談では技術に関する情報交換の方法について意見交換が行われ、言語の違いによる翻訳の必要性が課題として挙げられたが、世界共通言語である英語による情報交換が基本であることを確認しました。

会談は2010年北京での開催を宣言し、成功裏に閉会しました。



会談には3首脳のほか3カ国から約40名が同席しました。

KENCA AJCE JCCA 意見交換会

AJCE 事務局

日 時：平成21年11月26日(木) 14:00 - 16:00

場 所：(社)建設コンサルタンツ協会

参加者：KENCA Hun-II Moon会長 他 20名

AJCE/JCCA 廣谷彰彦会長 他 10名

2009年11月26日～28日に韓国コンサルティング・エンジニア協会(KENCA) Hun-II Moon会長他20名が来日し、(社)日本コンサルティング・エンジニア協会(AJCE)及び(社)建設コンサルタンツ協会(JCCA)と意見交換会を開催しました。

意見交換会の冒頭、廣谷彰彦AJCE/JCCA会長は、「AJCEはコンサルタント企業のなかから厳格な加盟条件をクリアした企業から構成されており、日本のコンサルティング企業を代表して、国際コンサルティング・エンジニア連盟(FIDIC)に加盟し国際連携を図っている」と挨拶しました。また、「JCCAは1961年に発足した由緒ある協会であり、所属する会員企業は日本の社会基盤整備に関わる、計

画・調査・設計・施工監理など多岐にわたる業務を実施してきた」と報告しました。

一方、KENCAのHun-II Moon会長は、「変化が一段と激しくなっている世界市場に対応するため、国や地域の枠を超えて、新たな連携を促進して行く必要があること、このような背景を踏まえ 今回の意見交換会は両国のコンサルティング・エンジニアが相互理解を深め、将来に向けた建設的な発展の機会を醸成するものであり、その成果に期待します」と挨拶されました。

両協会長の挨拶の後、日本側から「日本コンサルティング業界の動向と展望」、韓国側から「主な業務及び現況」についてプレゼンが行なわれ、熱のこもった意見交換が行なわれました。

尚、AJCEとKENCAは、2008年7月に相互協力や提携促進に関する覚書を締結しており、相互訪問や意見交換会を定期的に行っています。



AJCE/JCCA 廣谷彰彦会長と KENCA Hun-II Moon 会長



意見交換会参加者

新会員の紹介

所属・氏名：(株)アンジェロセック

AJCE 入会：2009年6月

会社概要：

創 業 : 2001年6月1日

所在地 : 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-23-1 マルネビル5階

Tel : 03-5369-8121(代表)

従業員数 : 46名 内技術者31名(2009年10月現在)

主な事業内容 : 建設コンサルタント(第18号-7246)

- ・人間中心の開発 / 社会・経済開発
- ・水、エネルギー、環境開発
- ・道路セクター
- ・運輸セクター
- ・構造、橋梁
- ・機材整備、コンストラクションマネジメント
- ・保全、補修、リサイクル
- ・防災
- ・持続可能な開発と研究
- ・建築、都市計画、産業施設

ご挨拶

弊社では2009年度より海外事業を積極的に拡大していくために、国際的標準約款FIDICに対する研究の必要性の認識が高まり、またコンサルタント会社の活動の一環として、国際的なコンサルティング活動に貢献したいと考えました。AJCEには、国内外において片務的とならない公正な標準約款の採用を働きかける活動を通じたコンサルタントの地位向上と安定に努めていただきたいと思います。微力ではありますが、弊社も会員の皆様とともにいくばくかのお手伝いをいたしたく存じます。

事務局報告

- 1 - 第230回理事会 報告

日 時：平成21年12月8日(火)

14:00 ~ 17:00

場 所：AJCE事務局

出席理事：15名 出席監事：2名

議 事(抜粋)：

1. 政策委員会・総務財政委員会
公益法人改革

- 2 - 日豪交換研修2009 報告

今年はオーストラリアから4名の若手技術者を受け入れました。

5月から事前研修として、受け入れ企業メンターと研修生のE-Mailによる交信を行い10月13日～30日にAJCE会員企業にて実施研修を開始しました。研修内容は本号で特集しています。

- 3 - AJCE 技術交流セミナー 開催

日 時：平成21年11月20日(金)

14:00 ~ 17:00

場 所：(株)建設技術研究所 6階 役員会議室

詳細についてはAJCEホームページをご覧ください。



- 4 - 平成22年 新年賀詞交換会 ご案内

日 時：平成22年1月6日(水)

18:00 ~ 20:00

場 所：日比谷 松本楼(日比谷公園内)

- 5 - その他 行事予定

平成22年2月9日(火) 第231回理事会

平成22年3月2日(火) 臨時総会

< 議題 >

・平成22年度 事業計画

・平成22年度 収支予算

平成22年5月25日(火) 定時総会

- 6 - 新刊 ご案内

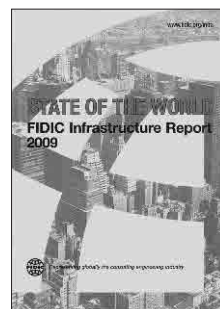
『 FIDIC Infrastructure Report 2009 STATE OF THE WORLD FIDIC 世界インフラ白書 2009 年版』

注文コード：IN-1

会員価格 6,825円

一般価格 8,400円

- 現在日本語版を作成中 -



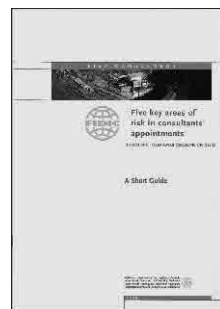
『 Risk Management - A Short Guide 2009 リスクマネジメント ショートガイド』

注文コード：AD-43

会員価格 4,725円

一般価格 6,300円

- 現在日本語版を作成中 -



『 Definition of Services

Guidelines Building Construction 2009』

注文コード：AD-44

会員価格 6,825円

一般価格 8,400円



- お問い合わせ先 -

各種行事・FIDIC書籍の購入についてはAJCE事務局までお問い合わせください

(社)日本コンサルティング・エンジニア協会事務局
事務局長：山下佳彦

〒110-0005 東京都台東区上野3-16-4

(文行堂ビル3階)

Tell : 03-3839-8471 Fax : 03-3839-8472

E-mail: info@ajce.or.jp HP: http://www.ajce.or.jp/

編集後記

今号では日豪交換研修2009を特集として取り上げています。一昨年の制度見直しにより事前研修などの仕組みを導入しましたが、各社の報告を見ると、研修運営が年々円滑になっている様子が伺えます。

業務多忙により視野が狭くなりがち(特に日本の)若手技術者にとって、異なる文化や意見に触れ、新たな人的ネットワークを形成できる事は、将来大きな財産となるのは間違いありません。なるべく多くの若手技術者がこのプログラムに参加できるよう、AJCEはもとより各社ともこの取り組みの裾野を広げていくべきだと思います。

最近の報道では、我々コンサルティング・エンジニアが係わる領域で、厳しい話題ばかりが続いております。このままでは若く優秀な人材が集まらなくなるのではないかと危惧しております。今我々にできるのは、より良い仕事の成果を生み出すよう日々努力するだけでなく、この研修のように魅力ある人的交流の場をいろいろな形で創造し、さらにその活動を積極的にアピールしていく事ではないか、そのように感じました。

(広報委員会・小林正樹 記)



広報委員会メンバー (2009年4月7日撮影)

会報記事はAJCE ホームページからダウンロードできます。 <http://www.ajce.or.jp>

AJCE 会報 新年号 Vol.33 No.3

2010年1月4日発行

発行 社団法人 日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE)
東京都台東区上野3丁目16番4号 文行堂ビル3F
TEL 03-3839-8471 FAX 03-3839-8472
URL <http://www.ajce.or.jp/> E-mail: info@ajce.or.jp

編集 広報委員会

デザイン・レイアウト 株式会社 大應
東京都千代田区内神田1-7-5

MEMO メモ

Lined writing area with horizontal lines and a vertical column of 20 circular punch holes on the right side.



AJCE とは (AJCE 定款 第3条 目的 より)

製造業や建設業などからの独立・中立性を保持する、民間のコンサルティング・エンジニア (CE) の地位と信用の向上を図ることを通して、科学技術や産業の発展、社会の福祉の増進、環境の保全、さらに海外との経済・技術協力の促進に貢献することを目的に活動しています。

AJCE 沿革

| | |
|------------------|----------------------------------|
| 1974 (昭和49) 年 4月 | 設立 国際コンサルティング・エンジニア連盟 (FIDIC) 加盟 |
| 1975 (昭和50) 年10月 | FIDIC 加盟記念大会 開催 (東京) |
| 1977 (昭和52) 年 8月 | 科学技術庁 (現 文部科学省) より社団法人として承認される |
| 1991 (平成 3) 年 9月 | FIDIC 東京大会 開催 |
| 2004 (平成16) 年 5月 | AJCE 創立30周年記念シンポジウム 開催 |

会員一覧 (平成21年10月13日現在)

(普通会員・43社)

株式会社 Ides
秋山技術士事務所
株式会社明野設備研究所
株式会社アンジェロセック
池田技術士事務所
いであ株式会社
株式会社エヌジェーエス・コンサルタンツ
OYO インターナショナル株式会社
有限会社大塚エンジニアリング
大本俊彦建設プロジェクト・コンサルタント
株式会社オリエンタルコンサルタンツ
基礎地盤コンサルタンツ株式会社
有限会社クープラス
黒澤 R & D 技術事務所
株式会社建設技研インターナショナル
株式会社建設技術研究所
国際航業株式会社
桜井技研
清水技術士事務所
創造工学研究所
田中宏技術士事務所
中央開発株式会社
株式会社長大
電気技術開発株式会社
株式会社東京設計事務所
株式会社東光コンサルタンツ
長友機械技術士事務所
株式会社中堀ソイルコーナー

株式会社日水コン
二宮技術士事務所
日本工営株式会社
株式会社日本構造橋梁研究所
株式会社日本港湾コンサルタント
日本シビックコンサルタント株式会社
パシフィックコンサルタンツ株式会社
早房技術士事務所
有限会社樋口コンサルタント
平野技術士事務所
プラント設計株式会社
ペガサスエンジニアリング株式会社
株式会社森村設計
八千代エンジニアリング株式会社
湯浅技術士事務所

(賛助会員・5社 6名)

株式会社石垣
株式会社荏原製作所
株式会社クボタ
住友信託銀行株式会社 東京中央支店
株式会社ドーコン
井口 直樹
佐久間 襄
海藤 勝
小泉 淑子
竹村 陽一
藤江 五郎

(企業内個人会員・164名)

(五十音順)



Association of Japanese
Consulting Engineers

社団法人 日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE)
(FIDIC加盟機関)